

対話：多様性・持続可能性と考古学

吉田 泰幸（以下、「吉田」） まずは羽生先生、松本先生、話題を提供していただきありがとうございます。この会場には若い人もいれば、それなりの年齢の方もいれば、日本以外の出身の方、幸い本日のテーマどおりに多様な方に参加していただいています。随時会場の方も含めて進めていきたいと思っています。まずはジョンさんから、羽生先生との思い出話も含めてなぜ今回のテーマにしたのか、文化人類学の観点からみたコメントをお願いしたいと思います。

ジョン・アートル（以下、「アートル」） 少しだけ自己紹介をします。私は金沢大学に来て7年目で、専門は文化人類学です。博士課程の時にカリフォルニア大学のパークレー校、羽生先生のところにいました。羽生先生はパークレーに来て5年目くらいだったと記憶しています。私は能登半島の村落の研究をしていました。その当時は市町村合併が話題で、合併後に村はどう変わっていくか、今までのまちづくり活動はどう変わっていくかが主なテーマでした。考古学に関心を持ったのは能登半島での調査がきっかけでした。私のフィールドの鹿西町では、考古学の発掘、発見によってまちづくり活動をしていました。一つは「弥生時代のおにぎり」。町には日本最古おにぎり化石というキャッチフレーズの杉谷チャノバタケ遺跡があって、おにぎりの里と名付けて、おにぎりくん・おむすびちゃんの仲良しのキャラクターを作ったりしていました。もう一つ、今では国史跡になっている雨ノ宮古墳群があって、考古学の遺跡を、まちづくり、あるいは町のアイデンティティーとして利用していく過程を見たのが考古学に関心を持ったきっかけです。最近私たちが行っているプロジェクトは、考古学の多様性と文化資源としての利用法をテーマにして、「考古学と現代社会」というセミナータイトルで開催しています。

今日のテーマは多様性と持続可能性です。これらは最近の羽生先生の研究で重要なキーワードですが、これにジェンダーの話を重ねました。その理由は、考古学の中の多様性に目を向けよう、ということです。考古資料のアセンブリッジの多様性だけでなく、解釈の多様性、考古学に参加する人々の多様性です。持続性というキーワードも考古学で議論する集落の継続性にも関係します。考古学は考古学的な知識を作る学問というだけでなく、社会の中でどのような位置付けかを考えると、考古学の学問

* 下部にある註は吉田泰幸による
日本以外の出身の方 セインズベリー日本藝術研究所のサイモン・ケイナー (Simon Kaner) 氏

も参加していた。また、オランダ出身で東京大学文化資源学研究室のイローナ・バウシュ (Ilona Bausch) 氏の参加もあった。

分野として多様性と持続性も視野に入ってくる。そこでどういうふうこれから考古学を続けていったらいいか、という問題意識が羽生先生の発表には含まれていたと思います。発掘ばかりをしていると当然、遺跡がそのうちなくなる。公共事業の予算では、今の日本考古学の枠組みは維持できない。では、これから考古学そのものが持続するために何をすればいいのか、どういうふう考えていくのか、そこには考古学だけではなく、社会の多様性と持続性との関係も視野に入れる必要がある。そうすると、当然ジェンダーに関する議論を取り入れる必要が出てくる。ジェンダーの議論の中で表面に出てくる問題の一つは表象（Representation）の問題で、現代のジェンダー観を過去に当てはめて、過去のジェンダーを表象すると、それが今のジェンダーイデオロギーを強めることにもなる。現代社会への貢献を考えると、過去のジェンダーイメージを変え、多様なジェンダーのイメージを作っていくことによって、よりよい将来に貢献していけると思います。

まず羽生先生にお聞きしたいのは、先生が日本で考古学に出会って、日本の大学で勉強して、そこからカナダとアメリカに旅立って行って、今日のテーマに至ったのは、現在勤めているパークレーの影響が強いという印象を受けました。特にコンキー（Conkey）さんのジェンダー考古学の研究、今日のお話の中心テーマのひとつである Environmental Sciences、小規模農業、それを推進する活動もパークレーで盛んです。パークレーで働くことによって、女性研究者、縄文研究者としての羽生先生に何か影響があったのか、つまり現在の研究テーマに至るまでに具体的に影響を感じることがあったかどうかをお聞きしたいです。

羽生 淳子（以下、「羽生」）パークレーは面白いところです。なにが面白いかというと、アメリカ西海岸の大学というのは、ハーバードなどの東海岸の大学と違って、実験的なことをやるように奨励してくれます。ハーバードやイエールが「正統派」なのに比べて、パークレーでは、失敗してもいいから新しいことをやりましょう、新しい考え方を出すのが研究者の使命です、という点が強調されます。野球で言えば、三割バッターだったら上出来、あと七割は外れてもいいというような考えがあって、その代わり、堅実なバントのような研究をしても全然評価されないところ、つまりとにかく新しい考えを出そうということです。ただし、その一方で、新しいことをやりすぎて企画倒れになっている場合もあって、例えば現代音楽のような、確かに新しいけれど何が面白いのだろうという研究もあります。それでも、そういった気風があると、例えばハーバードやイエールだと「それではダメだ」と一蹴されるような取り組みでも、パークレーだと努力賞は得られるような雰囲気の方が中心です。そして頭の回転の速い人が多く、そういった人たちが死に物狂いになって新しい考えを出すところに全精力を集中しているのがパークレーです。その中で、パークレーらしいリベラルな土壌が育ってきました。特に、1960年代、70年代のベトナム戦争の頃から反戦運動にコミットしてきたリベラルな土壌が年配の先生たちにはあって、私がパーク

レーに行ったときのお母さん世代にあたるローラ・ネイダーという先生もそうだったのですが、そのような先生たちから、考古学を社会にどう繋げるのか、ゆっくりでいいから考えなさいねと言われました。私は本当にゆっくりなので、10年以上かかりましたが、今言ったようなパークレーの土壌の影響は大きいと思います。

それに加えて、私の両親はもともと環境問題や平和運動などにずっと関わっていました。私の中ではこれらの考え方と考古学は長い間別々、つまり、二本立てになっていたのですが、ネイダー先生たちが、その二つは繋がられると言い続けてくれたのが大きかった、という気がします。パークレーにいたことによって、考古学とそれらの問題意識が繋がったと言えると思います。

もともと、私の研究分野は環境考古学という、考古学の中では「プロセス系」の考古学です。考古学と多様性の話は繋がっていないのではないかと思う人も多いかと思いますが、環境は、実は現代の社会問題とダイレクトに繋がっています。しかし、1970年代～80年代までのプロセス考古学は、環境の研究を現代の問題と直接結びつけようとはしませんでした。それがやっとここ10年くらい、「プロセス」と「ポストプロセス」の「いいとこ取り」といいますか、両者が前ほど綺麗に分かれなくなり、いろいろな流れが出てきた中で、多様性という概念が、改めて考古学研究の一つのキーワードになってきていると思います。多様性は、生物多様性、つまりバイオリジカルな多様性から文化の多様性まで幅広い意味で注目を集めています。それとともに、90年代後半以降、マイノリティの権利を含めて、いわゆるステークホルダーと言われている様々な立場から考古学に関わる人たちの視点を尊重する研究の流れが起こり、その中で、視点の多様性の重視が改めて強調されるようになりました。それは、単に学問の中での流行というだけではなく、多様性を重視していかないと、学問をできる社会環境自体がなくなるのではないか、という危機感が研究者の間で強くなってきていると思います。こうした流れの中で、社会に対して考古学に何ができるのか、日本の考古学は世界の考古学に対してどのような貢献ができるのか、ということを考えてときに、今回お話ししたような貢献の仕方もあるのではないかと思うようになりました。

吉田 今のお話の中で出てきた、「プロセス」と「ポストプロセス」という話は、主に英語圏での考古学の議論で馴染みがない人もいると思うので、簡単に説明していただけると助かります。

羽生 ポストプロセスは、簡単に言うとポストモダンの思想の一部です。社会科学の

ローラ・ネイダー Laura Nader
法の人類学 (Anthropology of Law) の専門家。
環境問題などの社会運動家で独立系の大統領候補
として著名なラルフ・ネイダー (Ralph Nader)
は実弟。

「プロセス系」の考古学 「プロセス考古学」につ
いての註 (130頁) 参照。

「ポストプロセス」 130頁の「ポスト・プロセ
ス考古学」についての註参照。

思想を考えるときに、文明は時代と共に進歩していき、技術の革新はずっと続いていくと考えるモダニズムが一方にあり、それに対するポストモダンの考えは、そうではない、それは続かない、その代わりに考えようという視点です。そのポストモダンの考古学バージョンが、ポストプロセス考古学と呼ばれているものです。1980年代の半ばくらいにポストプロセスの大きな流れが起きました。ただし、ポストプロセスが出てきた時には、掛け声倒れなところもあり、初期には、論文の前半部ではすばらしい理論を提示しているものの、後半のケーススタディを見ると、「え、これだけなの」といったものもかなりありました。その次の段階では、色々なバリエーションが出てきて、プロセスかポストプロセスかの二者択一でなくてもよい、と私のカナダでの先生のブルース・トリッガーが言い始めたのが、90年代の半ばぐらいだと思います。このような変化を考える際に、その背景にある大きな社会状況の流れは大事だと思います。特に考古学の場合には、立論の過程で前提・仮定がいくつも入るので、どういう形で論を立てて、どのような理論的な流れの中に自分の研究を位置づけるのが大事です。

考古の議論では、データの解釈が大きな部分を占めます。例えば石鎌をなぜ鎌（やじり）と言えるかという、民族誌事例で同様の形のものを鎌に使っているという知識があるから解釈ができるわけです。私が小学校四年の時に、最初に石鎌を拾った時には、それを逆さに持って、「カンガルーの頭みたいな形をした石を拾った」と母に言った記憶があります。そういった例から考えても、考古学では解釈の領域がきわめて大きな部分を占めています。それを理解した上で、現時点で分析可能な資料を多様な角度から検討し、論理的に説明可能な解釈を提示するのが考古学者の宿命だと思います。ですから、論文を発表する際にも、もう一歩下がって自分の研究を俯瞰して、どのようなデータと前提に基づいて分析を行ったのか、そして得られた結果は学問の大きな流れの中でどのような意味を持つのか、ということまで含めて提示するのが研究者の仕事です。それができるようになるためには、社会科学とは何か、ということがしっかりとわかっていなければなりません。考古学の場合は、真面目な人ほどデータの収集に留まりやすいので、そのあたりをきちんと考える必要があると思います。

今日、松本さんの話をうかがって特に新鮮だったのは、博物館の展示の話です。アメリカの学生を日本の博物館に連れて行くと、ほぼ確実に、男女の固定的な役割分担の展示について、「あの展示はなんなんだ」「おかしいじゃないか」といったコメントが出てきます。これが日本の場合だと、「おかしい」と言い出すのにも躊躇する、あるいは口に出すと変わっていると思われるのが現状だと思います。これは男女平等という以前の問題です。ものの考え方、発想の自由さという社会科学の根幹から

ブルース・トリッガー Bruce Trigger
代表的な論文として Trigger 1984、著作に同
2006 がある。後者は、2015 年に下垣仁志氏に

よって邦訳版が出版されている（『考古学的思考
の歴史』東京：同成社）

見て、論理的な説明ができない点がおかしいのであって、至急なんとかしなくてはいけない問題だと思います。

今日は、20人近くの方に来て頂いているわけですが、皆様が今度講演や授業をするときに、学生に、この展示や解釈の妥当性について考えてみましょう、というだけでも変わると思います。変えるのは、そんなに難しいことではないと思います。私が北米に留学したときに、何人かの方からは、日本の考古学は女性をまだ登用できるようなシステムではないから、海外に行くのですねと言われました。そのときは、日本のシステムを変えるよりは海外に行った方が早いという考え方もなかったわけではありませんが、実は、その時には、あまり深く考えて行ったわけではありません。もちろん、狩猟採集民の研究をするためには狩猟採集民の実感があるアメリカ、カナダがよいのではないかという思いもありました。実際には、北米に行ったことによって得たものはたくさんあり、そこから広がったネットワークは大事です。今日のイベント自体は小さいものですが、そこから広げられる場はいろいろとあるのではないかと思います。松本さん、いかがでしょうか。

松本 直子（以下、「松本」） 羽生さんが指摘されたことは本当にそのとおりで、日本の若者は、権威を疑ってはいけな、そういう教育をされていると思います。だから博物館の展示について、私が「いやこれはそうじゃない可能性もある」と話をすると、レポートで「わたしは騙されていたのか」と書いてくる。普段からいろいろなものを、「本当にそうなのか」と批判的に見る姿勢ができていれば、20歳になって急に驚愕しなくてもいい訳です。自分で「これはどうなの？」と思う機会はいくらでもあるはずですが、教員である私が言うから、「あ、そういう風に考えてもいいのか」と思うらしい。自分で考える力という教育が、おそらく根源的なものとしてすごく大事だと思います。

アートル ジェンダーについての発表を聞いて、文化人類学の立場から少しコメントします。文化人類学では、特にアメリカは昔から女性が多いです。一番有名な人物がマーガレット・ミードです。彼女はサモアの方で、10代の反抗期というのは生物学的に普遍的なことか、それとも文化的なことかを問う調査をしていた。サモアに行くと、自分の友達の女性と話をし、自由にセックスしているいろいろやって、そこで反抗期を感じることはない、というようなことを本で書いた。それによって1960年代のフェミニスト運動とかヒッピー文化の運動、フリーセックスの流れもあって、彼女はその運動の代表的な人物になっていった。マントを着て、ロード・オブ・ザ・リング

マーガレット・ミード Margaret Mead
文化人類学者。ニューギニアでのフィールドワークをとおして性に関する姿勢や女性の社会的地位について詳述し、アートルが述べるように1960年代のフェミニズム運動、フリーセックスやヒッ

ッピー文化に影響を与えた。「マントを着て・・・」というのは、1960年代にミードはマントと杖という出で立ちで講演会を行っていたこともあり、彼女のカリスマ的な存在感を強調することにもなったエピソードの一つである。

とかホビットに出てきそうな格好で講演したりもしました。

文化人類学でジェンダーに関連して考えていることは主に二つあって、一つは文化人類学の中で男性女性、ジェンダーの可能性を研究してきている。ジェンダーについて「こうであるべき」という思考はあるかもしれないが、まずは人類の、現代の人たちの多様性を見て、女性の権力が強い社会、ない社会、それらを全部紹介することによって、私たちは自分たちの社会を批判的に見て変えていける。もう一つは学問の中で女性が有名になり強くなったことで、ジェンダーの課題というのは文化人類学の中で昔からあり、今でも強い関心を持たれている。そういう認識で日本を見てみると、私が知らないだけかもしれませんが、そもそもフェミニズム運動があるのか、あるいは有名な女性の学者、考古学の中で女性はどのように活躍できる、こういう生活ができるとか、そうした話をしてきたようには見えないので、今の日本でジェンダーの問題、特にジェンダーの視点で考古学を批判的に見たりするのは、一つ大きな壁があると感じますが、どうでしょうか。

松本 文化人類学はみんなの関心を引くような研究事例があり、著名な研究者がいて、それがジェンダーという問題にすごく多くの人が目を向けるとてもいいきっかけになっていると思います。ロールモデルはすごく大事で、これは学問に限らずなんでもそうです。女性の管理職が増えないという問題もそうですが、こういう人になりたいという具体的なイメージがない状態では、どこに向かっていくべきか、考えることがとても難しいです。それがジェンダー考古学では、特に日本では、なかなか難しいところかなと思います。

それから文化人類学は実際に今生きている人にお話を聞いたりできるので、多様性というのはすごく直接的に見えます。ミードの研究についてはいろいろ批判もありますが、それも今の社会の中でさらに追求できるから、「いやこうじゃなくてこうだ」というような、多様性の中身に迫る研究ができます。先ほど羽生先生も言われたように、考古学の情報は本当に断片的で、最終的にはほぼ解釈に依拠しているわけです。そういう中で当時の社会のシステムとか、さらにその文化の実態にせまろうとすると、ある種の過程を積み重ねていかないといけなくて、その中でジェンダーはどうしても、土器は女が作ったことにしましょうとか、石器は男が作ったことにしましょう、となってしまう。そうするとこのデータはこういう風に解釈できます、通婚圏がこういう風にわかりますとなって、やりやすいです。それと表裏一体の関係で実際のジェンダーの多様性というのが見えにくくなっていると思います。それをいかに空想ではなく、データに即して本当に多様なあり方があるということを見ていくのが、すごく重要だろうと思います。

土器は女が作ったことにしましょうか、石器は男が作ったことにしましょう G.P. マードックらによって開発された通文化比較のための

Human Relations Area Files (HRAF) を参照した都出比呂志氏の研究 (1989) が代表的。

アートル ありがとうございます。では会場からもコメントが欲しいのですが。

吉田 羽生先生の話は、考古学的成果の提示と、それをどう現代社会に生かすかという提示、この二本立てだったと思います。この前段の考古学的成果の提示に対して、なにか意見がある人もいるのでは、と思っています。羽生先生から聞いてみたい人に振ってもらっても構いません。

羽生 では、今日はせっかく堤先生がいらしているので、いかがでしょうか？

堤 隆（浅間縄文ミュージアム。以下、「堤」） そうですね・・・すぐはちょっとできない・・・

羽生 では、中村大さん、いかがでしょう。

中村 大（立命館大学グローバルイノベーション機構。以下、「中村」） 研究内容の質問でも良いでしょうか。中期末に三内丸山遺跡から居住の痕跡が見えなくなっていくことが、三内丸山遺跡の衰退というか、なにか崩壊しているのではないかというお話がありました。その崩壊している時期、つまり三内丸山から住居がなくなる時期に、その周囲、例えば沖館川の反対側で、中期末の大木10式期の住居が発見されているわけです。三内丸山だけを見ていると生活の痕跡は無くなっていますが、周囲を見るとそこへ移動していると理解できるかもしれません。

羽生 確かに散らばっていますよね。パークレーに関根達人さん（弘前大学教授）に来て頂いた時にその話もでたのですが、実際に人口が減っているかどうかは、東北、特に北東北の場合についてはさらに検討が必要です。ただし、大遺跡に集まっていた人々が周辺に散らばって行く過程は、いずれにしても認められるわけです。例えば、インダス文明のいわゆる崩壊についても、寒冷化ではなく乾燥化であり、大きなセンターはなくなっていくが、周辺に散らばっただけで、人口のトータルはおそらく変わらない、という意見もあります。このような例も含めて、大きなセンターが解体していく過程の解明は重要だと考えています。

もう一つ、今日の講演では触れませんでした。三内丸山の場合には、住居址数の多い円筒上層dとe式期については、実のところ小さな住居が多く、狩猟採集民の研究をしている私の感覚でいうと、あれはテントくらいのサイズではないかと思っています。この大きさでは、一年を通じてそこに住むのは難しいかもしれないので、遺跡の機能の時間的変化についてもさらに研究が必要です。

中村 大木10式、いわゆる中期末には、住居は三内丸山遺跡の場所から別の場所に

移動し、その一方で環状配石を持つお墓とか、土器棺のような葬送の痕跡が増え、居住域から墓域へと、三内丸山遺跡の機能が変わり始めているのではないかと考えています。

羽生 私もそう思います。

中村 そうすると、これまでの「居住の痕跡がなくなったから三内丸山は滅びました」という説明ではなく、場所の機能に変化が生じたという説明の方が適切なのかもしれません。そして、その変化を促した社会的・環境的要因について考えた方がいいのかもしれない。

もう一つ、盛土の石器組成についてはどうお考えですか。中期の円筒上層式の前半期は、居住域出土の石器組成では磨石類など植物性食料の加工具が増加します。一方、北盛土の報告書をみると、円筒上層 a 式から c 式期には、石鎌が多いです。場所により石器の組成に違いがあるのではないのでしょうか。つまり、盛土では、土偶などさまざまな祭祀道具も捨てている空間であり、祭祀行為の際に石器の取捨選択がなされ、生活道具のセットが変形されている可能性もあるかな、という気がします。

羽生 それはあると思います。ただし、石器組成の検討をするためには、時期を確実に押さえることができる資料に限定する必要があります。捨て場である盛土の場合は、上下の移動の可能性が考えられるので、統計的なデータとして使うのには、慎重さが必要かと思います。最近、新しい報告書も出ているので、以前よりは傾向が見えやすくなったかと思いますがね。円筒上層 a 式の古手までの時期は、下層 d 式と石器組成の特徴が近いようです。最終的に問題になるのは、円筒上層 a 式の新しいところから上層 b・c 式について、個別の型式期に伴う石器組成をどの程度押さえられるのか、ということだと思います。特に、三内丸山遺跡の円筒上層 a 式期後半から上層 b 式期に関しては、住居址の数が少ないです。少ない中で、統計的にはかなり無理をして集計した結果が先ほどの分析例です。ただし、周辺の遺跡の石器組成を見たときにも、円筒下層 b 式期から上層 a 式の古手までの石器組成と上層 b～d 式期の石器組成には、全体に相違があるようです。

中村 そうですね。盛土では区別された層自体に時期幅があるので、一つの層のなかで細かな変化はあんまりよくわからないですね。

羽生 時期がはっきりとわからないものは、やはり統計的な分析には使いにくいですよね。

中村 それでも盛土の形成時期から考えると、円筒上層 b 式から d 式ぐらいが多いの

かな。

羽生 そうですね。盛土の堆積時期を正確に押さえるためには、一つ一つ報告書を開けてみるしかないわけですが、中期前半については、確実に時期を限定できる石器組成データは、現時点では比較的少ないと思います。先ほどの年代測定の話でも、上層 a～d 式までは、AMS 炭素年代測定値で見るとかなり重なってきてしまいます。ですから、今まで 500 年単位で考えていた実年代について、各型式期が実際にどのくらいの時間幅なのか、ということを含めて、まず検討するのが大事ではないかと思います。上層 b から d 式期について、短い時間幅にもかかわらず盛土に多量の堆積土があるということになりますと、今度は、上層 a 式後半～b 式期の住居がどこにあったのかという点が問題になります。そうすると、そこで、三内丸山遺跡の機能の変化、というところに話が戻ってくるのかと思います。市川さん、いかがでしょうか？

市川 健夫（八戸市埋蔵文化財センター・是川縄文館） 以前、青森県内の遺跡数・竪穴住居跡数の検討をしました。私は太平洋側、青森県の東部の方を担当したのですが、やはり三内丸山遺跡などを見ていると、上層 a から c のあたりが、住居の認定についてかなり難儀していた部分です。ですから（上層 a から c は）絶対年代という時間幅が短い印象があります。そういうデータも出ていますし、確かにグレーゾーンの部分があるという印象です。

羽生 細かい話が続いて申し訳ないのですが、例えば下層 d 式期の遺跡でも、少し山側の横内遺跡では、石器組成の主体が石匙となっています。これは、遺跡の機能によって、石器組成に違いが出てくるということだと思います。ただし、大きな流れで見ると、今までのところ、先ほどお話しした時間的な変遷と矛盾するデータは出ていません。その中で、盛土の円筒上層前半期に、石鏃がどれだけ入ってくるかについても一度見てみる価値はあると思いますが、今まで見た中では、石鏃が石器組成の主体になるのは、上層 e 式期に近いのではないかという印象です。

吉田 今のやりとりは、羽生先生の言う解釈のプロセスに関わる、言ってみれば論争です。現代社会に対して考古学で何か貢献しようというときには、こういう議論を重ねた上で客観性なり科学性なりを担保した上でやる必要があるということです。これはみなさんも今のやり取りで実感できたのではないかな、と思いますが、堤さんの方はどうですか？

堤 そうですね・・・羽生先生の提示された未来を見て、発掘バブルの頃から大分、調査が減ってきていますよね。私自身も現場に立つことがなくなってきたというのが現実です。日本考古学の夕暮れ感というのが、それぞれの地方に張り付いている自治

体の皆さんにもあるのかもしれませんが、非常に閉塞感があると思いますが、これまで山ほど掘り貯めてきた、いわば文化・歴史資源、それらをこれからどういうふうにして社会に還元して、活用してもらうのかという課題が残されている。その実感はありますが、具体的にどのようなアプローチの仕方があるのかをちょっとお聞きしてみたいと思ったのですが。

羽生 おっしゃるとおり、今は、考古学を志す者にとって、とても難しい時代だと思います。特に行政の若い方達には、とても真面目な人が多く、真面目であれば真面目であるほど、きちんと掘らなくてはいけないというふうになりがちだと思います。でも、もともと考古学というのは、壊されていく遺跡がたくさんある中で、部分的にでも発掘して、そのデータを検討しましょうというものだったと思います。

これに関連して、アメリカと日本の緊急発掘では、法律に大きな違いがあります。アメリカの場合は、まず公有地、つまり国有地などについては緊急調査の対象になりますが、民間の土地についてはその対象にはなりません。もう一つ大きな違いとして、アメリカの考古学では、サンプリングということをしします。例えば、10,000平方メートルの緊急調査があった場合には、その10%なり20%なりを掘るのが一般的です。ただし、その10%、20%をどう選ぶかについては、サンプリングの方法を綿密に検討し、欲しい情報が得られるように計画を立てます。サンプリングの是非については、1970年代から議論がずっと続いています。例えば、メソアメリカでサンプリングをランダムに行ってみたら、テオティワカン (Teotihuacan) というきわめて重要な遺跡が検討対象に入らなかったのも、やはりサンプリングは発掘方法としては適切ではない、という議論もありました。しかし、大多数の発掘では、サンプリングをするのが一般的であり、バークレーの大学院でも、一年生のときからサンプリングの重要性について、まず教えます。そうすると、ものの考え方自体が違うわけです。

歴史的な事象は全てが個別なので、発掘できる場所は全部掘るとというのが日本の考え方です。その考え方が日本の考古学を支えてきたわけですが、それが良いか悪いかは別として、それをいつまで続けることができるのか、いずれはお金がなくなってしまうのではないかという問題もあります。そのような状況の中で、大きな社会科学の流れの中で考古学をどう位置づけるかということ、改めて若い世代の考古学者に教えていくべきなのだろうと思います。そして、教えるためには、教える側がそれを学んでいなくては教えられないわけです。

私は、日本の考古学者はアメリカの考古学者やイギリスの考古学者と比べて、引けをとっているとは思いません。しかし、今の日本の考古学に何が必要なのかと考えた場合に、社会科学の大きな枠組みの中で学問の目的をどう設定していくのか、という議論が必要だと感じます。また、英語圏の大学で教える基礎文献を、大部分の日本の考古学者は読んでいないという例が多くあります。英語を読まなければいけないと言っているわけではなく、フランス語でも、ドイツ語でも、中国語でも良いわけです。

いろいろなものの考え方があるのはもちろんですが、社会科学というものが西洋をはじめとする世界の科学に則ってできたものである以上、基本的なものの考え方の土台を共有していないと困ります。基礎になるものが共有されていないところから議論を始めてしまうと、国際的な議論するのは難しいと思います。ユンボのサイズがコンマいくつなのかを瞬時に判断できるのが優れた考古学者ではなく、社会科学の文脈で考古学をもう一度考え直すことができるかどうか問われているわけです。それができなかつたら、考古学の未来は、かなり厳しいのではないかと私は思います。

アートル ジェンダーの方にも話を戻していきたいです。羽生先生のお話ともリンクしますが、私は最近の縄文ブームにすごく関心を持っています。というのは、その「縄文」という概念は考古学の知識の中で、考古学のプロセスのなかで出てきた概念ですが、「縄文」という概念、アイデアをある意味で自由にインスピレーションを受けて活動している人がいる。2013年の3月に吉田さんとニューヨークに行き、チェルシー地区のギャラリーで“Arts of Jomon”という展示を見ました。“Arts of Jomon”というのは日本でも開催されていますが、この間（2014年9月）の三内丸山遺跡でのお祭りに行き、アーティストのいろんな活動を見たりしました。その「縄文」を特に絵で描くときに、男性はこうであって女性はこうであるという特定のイメージがありますが、それらのイメージはどういう風に、現代社会の「縄文」を取り入れた活動に影響しているのか、と考えています。一つ思い出すのは、今まで会った“Arts of Jomon”などでアートをしている人は男性が割と多いです。ニューヨークで会った人が、なぜ縄文に関心を持つのかと聞くと、「縄文は Happy で Free」と言います。なんとなくそれは男性的な思考で、自分が好きなことをやって Free で Happy な生活ということで、これは私の解釈ですが、女性の Happy と Free のイメージではないような気がしていて、そこはどう思いますか？

安芸 早穂子（以下、「安芸」） Jomonism に関しては、青森県の男性職員が選んでいるからではないかと思ったりします。このような場合も、やっぱり誰が選んでいるか、という非常にシンプルな問題があって、選ばれる側の能力に関わっている部分ではないと思います。

逆に松本先生に多様性に絡めて、質問と提案をしたいです。まず質問というのは、もし私が学生だったら、どれだけのインパクトとリアリティを持って、自分の問題としてジェンダーの話を受け止めるかな、と思ったときに、先ほど出された比較のグラフでは、主に西洋の国と日本の比較をされていました。つまりはアメリカやヨーロッパと日本との比較でしたが、例えば今すぐくタイムリーな話題といえば、ノーベル平和賞をとられたパキスタンの女性などは、まさしくジェンダー問題の極みだと思います。むしろ無自覚の根源的ジェンダーはアジア、アフリカの方でよくわかる。さらにイスラム圏の問題とかと比較するとどうなのか。今の若い人たちは毎日テレビや

ニュースで接する世界の情勢の中で見ると、この人たちと比べることがなければ、現実感を欠いてしまう、ひと昔前の比較になってしまうのではないかと思います。日本の立ち位置を常にちょっと西欧に対して遅れているというステレオタイプの比較ではなくて、さらに過激に、(フェミニズム) 反対を信念を持って唱えている国はどうするのだとか、そういうことをまず言うていただくと、もっとこう、リアルタイムな、特に女性としては現実的で切迫したものとして捉えられるのではないかと思います。というのが一つの感想です。

同じように、私が展示に関わるものとして、長年復元イメージについて、いろんな考古学者の方と仕事すると、所詮一人一人の考古学者の方が自分の個人史の中の今、というところでそのイメージができていて、というのを痛感するわけです。非常にコンサバティブなイメージを持つ人、リベラルなイメージを持つ人、それぞれの方のバックグラウンドがあって築き上げられてきたものだなと思います。10人いれば10人の縄文時代のイメージがあるとすれば、わたしは展示自体にも多様性を持たせていいと思っています。一つのイメージの展示にするというのがなぜ必要なのだろう、と思います。研究者だけで絞込んでしまわず、もっと見にくる人に絞込むプロセス全部を提示してしまえばどうかと。4種類5種類の同じ時代の同じ村の復元のイメージがありますということを提示して、例えばその大学生の子が、わたしにはこのイメージが一番すっと入ってきましたとか、これは何でこうなるのですか、というような議論が生まれる素地を、見る人の側にも投げかけるといような、そういう展示というのは、考古学だけじゃなくて博物館が生きのびていく上でも、考える時にきていうことです。だから一つだけの展示にお金を注ぐのではなくて、ある程度お金を注いだ展示がたくさんある、そういうシーンというのは作れないのだろうかということ、今日のお話を聞いていてつくづく思いましたから、それを一つ提案したい。これは無理があるのでしょうか。

松本 それはまさにわたしがそうしないといけないと思っているところで、ただ博物館などでやっぱり実際にお仕事されている方の話を聞くと、「これ以上わかりません」と言うのはどうもこう、ハードルがあって、「これだけわかっています」と示したいようです。こうかもしれないです、こうかもしれないです、でもこうかもしれませんよ、という出し方をするのに抵抗があるのかな、という気がします。

安芸 海外の博物館でそういうことをしているところはないのですか？

ノーベル平和賞をとられたパキスタンの女性
2014年に当時17歳の史上最年少でノーベル平和賞を受賞したパキスタン出身のマララ・ユフス

ザイ。女性の権利が軽視される文化圏において、女性への教育の必要性を訴える活動を続ける。

松本 海外では、イギリスにあります。エイヴベリーの博物館で、新石器時代の人の復元がマネキンで作ってあり、半分ずつ別々のイメージになっていて、結構洗練された復元と、素朴な復元で、二説あります、あなたはどう思いますか、という展示があります。そういう展示が本来はいい展示で、単純にこうですよ、と示すだけではどうしても静的な展示になってしまって、これを覚えて帰りなさい、というスタンスになってしまいますが、まだこんな可能性があります、これはこういうデータに基づくところ、でもこういうデータに基づくところという可能性もありますよ、これらをもっとはつきりさせるためにはもっと研究が必要です、というアピールをした方が、むしろ今後の学問や博物館の未来のためにも、来た人に考えてもらう、参加してもらう展示をもっとやっていくべきだと思います。

安芸さんの最初のご意見ですが、今日は日本が欧米諸国に比べて遅れていることを示すグラフを出しましたが、実は授業の中では、ディスカッションを3回、学生にしてもらっています。最初は現代社会の中でジェンダーに関わる問題にどういうものがあるのか、というテーマでそれぞれレポート書いてもらってディスカッションする。2回目に、世界各地、現代日本以外の文化のジェンダーについて調べてくるようにといて、いろんなところのジェンダーについて学生は調べてきて、それを持ち寄って話をします。そうすると、イスラム圏、アフリカなどのいろんな地域の状況が集まるわけです。その中で日本での今のあり方を相対化する視点はできてきますが、ちょっと問題なのは、イスラム圏の国に比べれば日本はなんていいのだろう、よかった、で終わる学生が多いです。確かに比較すれば、何の問題もない、殺されることもないし、みたいな感じで一件落着となるケースもあって、なかなか難しいです。普遍的な女性の問題として見るところまでいってくればいいのですが、日本は世界に比べてマシでした、という話になりがちで、そこが難しいところではあります。

羽生 それでも、その普遍的な視点はとても大事だと思います。相対的なものではなくて、おかしいものはおかしいという、そのコンテキストの中で見る普遍性が問われているわけです。現代のコンテキストで先進国と言われている中で、これはやはりおかしいというところで見てもらわないと困ります。

松本 それぞれの文化の固有の歴史というのを踏まえた上で、同じ基準でみてあれはおかしいと言うのはどうかと思いますが、一方で普遍的なコンテキストに応じて何がいけないのかを考えた方がいい。後は人権感覚でしょうか。基本的な人権感覚を持てるかどうかというのはありますね。

ジェンダーに関して、クィア・アーケオロジーに取り組んでおられる光本さんが、

エイヴベリー Avebury イングランド南部の
新石器時代の遺跡。世界遺産に指定されている。

新石器時代人像の復元については114頁参照。

岡山からわざわざ来てくださっているのです、ぜひ感想をお話してください。

光本 順 岡山大学の光本です。松本先生からいろいろと、ジェンダーの話の聞いたり、クィア・アーケオロジーの話の聞いたりして、今はセクシュアリティに関する授業を今年、初めて教養教育の中で授業をして、松本先生の授業を聞いた学生が私の授業にきてくれたり、マイノリティの問題に関心があるような学生がきてくれたりしています。今、博物館の話が出ましたが、いろんな可能性がなかなか提示できないというのは、学術重視で、批判されない、なるべく人から批判されたくないというようなところが、日本ではどうしてもあるのではないかと考えています。欧米の博物館を見ると、社会になにかインパクトを与えたい、博物館の機能として、なにか社会に痛いものを残したいというのがあると思いますが、そうしたところが今後何かありうるのかな、と感じました。それから、いかに考古学が社会と、現代社会と結びつくかという話とも関連すると思いますが、少しずつ、少なくとも大学教育の方では、批判的に見る見方を育てるというのを私達の方でも、少しずつでもやっていきたいなと思います。常態的な博物館ではできないことは、大学の方が頑張ってるということも必要だと思いますので、少しずつ変化というのを、作っていったらなというふうに私は思います。感想で失礼いたします。

男性 B 松本さんに質問です。人間がフィールド、自然に出て行った時に、野生動物とぶつかった時に、対等に戦える、というのはどの程度の動物を想定していますか？

松本 野生動物と対等にですか？それは、人間側がどういう装備を持っているかにもよりますが。

男性 B 素手で。

松本 素手ですか？素手では、そうですね。うーん・・・かなり難しいのではないのでしょうか。

男性 B わたしが聞いた範囲では山猫とやって、勝てるかなあ、という程度らしいです。そのぐらいフィールドというのは危険性が多いわけです。ですから先ほどの絵を見ている、男が外に行っていかに簡単にうさぎとかを捕まえてきていますが、あれもものすごい労力が必要で危険もあるわけです。そこに例えば女性が出ていっても、多分、敵わない。そういう実際のパワーというか、狩猟というのは、餌を取れなかったら餓死する可能性もある。そのときに女性、当時、女性男性というのはあまり無かったにしても、やはり費用対効果という意味で、費用というのはお金ではなくて労力という意味ですが、それに対する効果があるはずですよ。獲れるかどうか、それは人間が

生きていく以上、絶対に比較しなくてはいけない。いかにも男が外で女が内で、それが問題という話がありましたが、あれは理にかなっていると私は思っている。必要であれば女性だって外に行ってやると思いますが、そこであんまり、先ほどの絵でもって、今の若い人にジェンダーがどうこう見せるのはいかがなものかと思えます。

松本 「男は仕事、女は家庭」というのは、生活の糧は男が採ってくる、女性はその経済活動は全くせずに、家で家事と育児だけをしているというのが、いわゆる「男は仕事、女は家庭」のイメージです。ただ、縄文時代や弥生時代は、女性が経済活動を全くせず、家事だけをしていたということは、まず考えられないわけです。

男性 B 当然ですね。

松本 食べ物を採ってくるといっても、イノシシに槍を持って飛びかかるというのはかなり危険ですので、それは男性がやるが多かったと思いますが、動物をとるにしても、罠猟など色々な捕り方があります。落とし穴などです。さらに、動物以外の植物質の食料は縄文人の食料の中では極めて重要であって、それは確実に女性もやっていることですので、お父さんが食べ物をとって帰ってくるのをお母さんが家で待っているというのは、やはり誤ったイメージになるわけで、その点を指摘しています。

男性 B あの絵については、私はそこまで考えることはないと思います。それは共同ですよ、基本的には。万が一女性が外で怪我したり、動物にやられたりしたとき、男の方が多分、抵抗力があるから、そういう意味で、学者ではないから私は、一般的な質問として聞いていますが、やはりある面、女性を保護していた、と思います、現実には。ただ三内丸山にしても、クリと、ドングリと、まだお米とかはない時代ですから、もちろん女性でも食べ物をとってきてもいい。海行って貝拾いもできるし、水もそうだし。ただ生きるということはそんなに簡単なことではないし、戦争もあったと聞いているから、そのときに今のジェンダーの解釈の仕方ですと、古代を見誤ってしまうのではないかと思います。だからああいう絵を見せるときは、もっとたくさん絵を見せる、一枚や二枚ではなくて、こういうケースもありますよぐらいにした方が多分いい。これは一つの意見です。そのぐらい、人間というのはリスクの中に生きている。今はリスクあんまりないです。基本的にはジェンダーというのは今の社会の中だけの話です。だからわたしから見ていると、ここは学者の人の集まりだから、これで多分学問的な積み重ねの上に乗っているからいいと思いますが、私は次の時代、先ほど先生が言ったように、次の時代にどうつながっていくか。例えば屍体の処理なんかも、別の話になってしまいますが、万が一、直下型地震が起きたときに、東京大阪で何万人の人をどうやって処分するのかというのがああるわけです。それはもう当然政権でもかなり調べ始めている。たとえばその屍体処理というのは10以上の過程がある

はずです、書類上で。そういうことを、現実にそういう災害が起きたときにできるのかと。しかもコンクリですから、埋めるところも多分東京にないから、そういうときに考古学から見たときに、そういう状況に対してなんか手を打てないのかなと思って、まあ今日話を聞いていましたが、それはどうですか。できれば、羽生さんの方がいいと。

羽生 まずジェンダーのところに戻りたいのですが、狩猟を男性がやるか女性がやるかについても相対的な問題だと思います。民族誌を見ると、小動物は女性が狩猟するという例は結構たくさんあります。

男性 B あると思います。

羽生 男性が大きな獲物を狩猟対象にしている、女性がもう少し小動物をとるという場合もあります。また、小動物に限らず女性も男性も平等に狩りをするという例も少ないですがあります。ですから、その社会の中での男女の分業について、それから分業でない作業についても、一つの要素からだけではなく検討する必要があります。

男性 B 脳の構造が違うといいますね。男は走り回るから、周りの景色から自分のいる位置を掴む能力が非常にいいんだけど、女性の場合はそれがちょっと・・・。

羽生 それはつまり、どこまでが生物学的なもので、どこからが文化的なものかということですよ。子供の頃からそうやって行動が制限されていたら、それに適応するということがあります。そういったことも含めて、次の世代がどういうことになるのか、直下型地震がきたらどうなるのか、ということはまさにいろいろな分野の人が考えなくてはならないわけで、当然、考古学者が貢献できることというものもあるだろうと思います。その際には、プラクティカル（実践的）なところで貢献できるだけではなく、ものの考え方が大事です。そのためには、いろいろな分野の人が集まって、様々な考え方があることをまず知って、そこから議論をするのが第一歩です。

アートル 部屋を出なければいけない時間が来てしまいました。吉田さんなんかまとめて。

吉田 ある意味スリリングな感じで終わったので良かったと思います。問題は根深い、しかし反面、これは取り組みがいがあるということだと思います。来年1月開催の「さよなら、まいぶん」にもみなさんお越しく下さい。